

ニュースリリース（2022年5月6日付公益財団法人国際医療財団）

第1回・第2回新型コロナウイルス感染症対策セミナーのご案内

公益財団法人国際医療財団（東京都大田区：理事長 瀬戸 皖一、以下 IHF）は、本年2月12日に第1回、本年4月21日に第2回新型コロナウイルス感染症対策セミナーを Zoom ウェビナーによるオンラインで実施しました。セミナーの対象は歯科・医科・介護・福祉従業者の方々でしたが、1000名を超えるご参加をいただきまして、ご関心の高さに驚くとともに、再視聴したいというご要望が、現在も続いております。

そこで、今回のニュースリリースでは、どなたでもご参加いただけるように You Tube 配信によるセミナーをご案内させていただくこととしました。ぜひともこの機会にお申込みをいただき、新型コロナウイルス感染症の対策成果が実現することを願っております。（視聴可能期間 2022年5月9日～同年5月31日）

[第1回新型コロナウイルス感染症対策セミナー]

講演1 「COVID-19 への対応—オミクロン株へどのように対応すべきか」

東北大学大学院歯学研究科 教授 小坂 健先生
厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策本部 クラスタークラス
厚生労働省社会保障審議会専門委員

講演2 「洗口液による新型コロナウイルス感染症予防」

認定 NPO 法人バイオメディカルサイエンス研究会 理事長 瀬島俊介先生

講演3 「微量唾液を検体とした SARS-CoV-2 迅速スクリーニング検査開発の現状」

鶴見大学歯学部口腔内科学 教授 里村 一人先生

講演4 「口腔・顎顔面領域における COVID-19 の感染対策」

東北大学大学院歯学研究科 教授 高橋 哲先生

司会・総括 公益財団法人国際医療財団 理事長 瀬戸 皖一先生

[第2回新型コロナウイルス感染症対策セミナー]

講演1 「COVID-19 への「対応—オミクロン株 BA.2 とは」

国立研究開発法人国際医療研究センター 国際感染症センター長 大曲貴夫先生

講演2 「COVID-19 と唾液腺～MA-T の有効な活用法について」

大阪大学大学院歯学研究科 教授 阪井丘芳先生

講演3 「洗口液による新型コロナウイルス感染症予防」

認定 NPO 法人バイオメディカルサイエンス研究会理事長 瀬島俊介先生

講演4 「感染症予防と口腔ケア」

米山歯科クリニック院長・NPO 法人 POIC 研究会会長 米山武義先生
青稜産婦人科クリニック院長 山道 玄先生

====

【視聴の申込みはホームページから受け付けております】

公益財団法人国際医療財団 <http://ihf.asia>

新型コロナウイルス感染拡大防止に向けての歯科医療現場からの緊急提言

新型コロナウイルス感染症の経緯は 100 年前に流行ったスペイン風邪とよく似ていると言われています。第一次世界大戦のさなかに米国発で始まったインフルエンザはみるみる世界を席卷し、特に戦争当事国に深刻な影響を及ぼして戦争の勝敗を決するまでに至ったとされています。工藤翔二先生によれば当時の日本内務省における流行性感冒の感染状況は驚く程精緻に報告されており、当時病原体をウイルスと断定するに至っていないながらも「病原体の排泄口および侵入門戸は主として口腔および鼻腔なり」と記載され、感染は主として咳嗽、嘔てい（くしゃみ）等の際における飛沫伝染による」と記載されています。この飛沫感染を防ぐためにマスクの重要性や「うがい」の必要が説かれていたとあります。

今回のパンデミックにおいても病原体である SARS-COV-2 ウイルスの受容体が唾液腺や口腔粘膜に多く分布し、感染者の唾液中にはウイルスが高濃度に存在し、それが飛沫となって伝播していくパターンが多く、まさに口腔が感染の交差点になっていることがいち早く日本の歯科医学研究者が実証しています。さらに「うがい」特に洗口をすることにより、どの洗口液を用いてもウイルスの感染価を 4 ケタも下げることが証明されています。それにも拘わらず今回の感染拡大防止対策の基本マニュアルから「うがい」が消されています。

仮に今回のパンデミックがこのまま収束に向かうとしても、その後いつ何時全く別のウイルスの来襲をうけるか予測できないことです。病原体が何であろうと人類は一丸となって平素から生活習慣として感染拡大防止策を講じていることが肝要と思われれます。少なくともコロナ系ウイルスであるならば、現有の消毒薬、洗口液には弱いという凡その予想が付きまします。著名なウイルス学の権威、京都大学の宮沢孝之先生は、新型コロナウイルスの場合、口などの感染門戸に付着するウイルス量をピーク時の 1/100 にすれば他の人に感染しないと明快に解説されています。

今回の新型コロナウイルス災厄はまだ終わっていません。しかも最悪の侵略戦争と重なって人類は疲弊し、築き上げてきた文明文化が根底から覆されそうな心配すら感じられます。オミクロン BA.2 変異株などは重症化率が低いので聊か気の緩みもあり、各国の感染対策も次第に科学的根拠から遠のいている感が濃くなって参りました。しかしオミクロン株の感染力は猛烈で、感染者は高齢者から若年者、さらに子供に移行しており、予断が許されません。今こそ国民一人ひとりがいつの間にか自分自身が感染しているかもしれないと自覚して、大切な家族に、愛する人に感染させないように、「うがい」の励行を日常生活に取り入れられるようお勧めします。

口腔ケアという概念は 1999 年日本の歯科医師米山武義氏が最高権威の医学雑誌 The

Lancet に発表され世界の脚光を浴び、いち早く日本の歯科の健康保険に採用されました。口の中には 700 種にも及ぶ微生物が 1 mg 中 1~10 億も常在し、互いに影響しつつ時々刻々と変化していますが、これらの誤嚥によって肺炎が惹起される可能性があることを示唆した論文です。口腔内の総菌数を減らすことによって不顕性誤嚥による肺炎を予防し得るとする口腔ケアの概念は日本の歯科医療の中に広く定着しています。

COVID-19 が WHO によってパンデミックと宣言されてから約 2 年余りが経過するいま、最も危ない職域とされる歯科からでた感染クラスターはわずか 2 件に留まっているのは偶然とは言えないでしょう。口腔ケアの論理が津々浦々の歯科医院にまで敷衍しており、全ての外来患者に診療前の洗口を求め、医療者自身も頻回うがいをする習慣が日常化していることが SARS-COV-2 ウィルス感染拡大防止に大きく寄与しているものと考えられます。

コロナ禍の真只中で、世界に先駆けて日本の歯科医学研究者が多方面から精力的に新型コロナウイルス感染予防に焦点を絞って取り組んでいます。いかに感染者の口腔から他の人に伝播しないよう制御するかが課題です。そこで本年 2 月 12 日、4 月 21 日に 2 回にわたって一般公開の緊急感染対策セミナーを開き、東北大、阪大、鶴見大歯学部の新々たる研究者、それにバイオセーフティ研究のメッカ BMSA、口腔ケアの米山氏自身からの実践報告を交え、さらに現代感染症研究の権威の先生方の特別講演を頂戴して熱心な討論が展開しました。歯科医療者のみならず、医療者、介護従事者、さらに一般市民を交えてのセミナー参加者は短い準備期間にも拘わらず延べ千数百名を超える規模に達しました。その結果新型コロナウイルス感染拡大防止策はウガイ、マスク、三蜜回避、それに手洗いが基本で、特にウガイはエビデンスレベルの高い有効な感染拡大防止策であるとのコンセンサスが得られました。

因みにウガイを励行することは口腔常在菌を殺滅するので有害であるとの意見により今回基本マニュアルから消されたかに仄聞しますが、口腔常在菌数はウガイにより減少しても必ずすぐ戻って来ますのでご安心ください。いずれの洗口液を用いても唾液中のウィルスの感染価は 4 ケタも減少して伝播力を失い、水道水でもその効果が発揮され持続するとのエビデンスが示されましたが、その一方で要事生成型であり保存性に優れた Matching Transformation System (MAT) が未来の洗口システムとして提示されたのは収穫でした。

令和 4 年 5 月 3 日

公益財団法人国際医療財団、一般社団法人国際歯科医療安全機構理事長
総合南東北病院口腔がん治療センター長
瀬戸皖一